

「して、その長身の男は何の為にこの村へ？」

客間の長椅子ソファに深く腰掛けた老人は、表情を厳しく引き締めて、眼前の少女に問い掛けた。ずっしりと重い石のような口調である。

イェル村の村長であるマディンマディンは皺だらけになった骨ばった手で、近頃すっかり痛むようになった膝をさすった。執拗に繰り返すのは、何も身体の痛みを宥めようというだけでなかった。

やや薄くなった白髪が村長である老人の苦労を物語るように、村の代表として自覚と責任を持って職務を果たして来たのだった。今も唐突アラランに舞い込んで来た問題に対して、たった一人憂慮していた。

窓の外には、樹齢が百年以上ありそうな大きな樗けやきがあり、緑豊かな枝葉が照り返すような日差しを遮り、木陰をこしらえていた。室内は風通しも良く快適だというのに、老人の額にはじつとりと汗が滲んでいる。

そんな村長の様子を、燃えるような緋色の双眸が、どこか冷めた目で見ていた。少年のような格好に、頭を藍色の布でぐるぐる巻きにした少女リデルだった。

決して口には出さないが、リデルは哀れに思った。外の人間がやって来た、たったそれだけの事で狼狽するのなら、話し掛けられた時には卒倒してしまわないかと心配になる程に。

「本人はこの村と御山に用があると言った……ヘラヘラした奴の言う事だから、嘘かホントか分からないけど」

目上の者に対してもリデルは先刻と同じような口調で話した。

「御山……この時期に得体の知れない公人とはな……もしやとは思いますが、用心に越したことはない。リデル、分かっておるな？」

「あんな奴たれ、結局何も出来ないで帰っていくだけに決まってる」

老人は脅しをかけるように注意を促したが、リデルは相手にするまでもないといった様子だったが、ふと何かを思い出し、怒りの指バロメーター 標を一つ押し上げたそのとき、

「……なら良い。それと次の狩りの時期だが——」

村長が切り出した途端、リデルは拳をぐっと握り締めた。そのまま殴り付けてしまうのではないかと思っただが、何とか踏み止まり、足元に視線を落とした。

「……アタシは、もう関わらないって言った。やりたければ勝手にすればいいじゃない」

「リデルや……今更、何処に戻る道があるというのだ。我々には進む以外の道はない」  
リデルは歯痒さに唇を噛み締めた。そんな少女の心情を知ってか、老人は厳しく諭し、

「我々が力を合わせれば、村が豊かなになる。皆が幸福になる。誇るべきことだ。何も後ろめたいことなどない」

優しく赦した。そして強く目を瞑り、一呼吸置いて締めに入る。

「……それに、これはお前だけの為ではない。お前の父の為でもあるのだぞ？ お前が御山の案内ガイドを続けて村に貢献していれば、村人の口も手も出せんようにしてやる。いずれ

人々の視線も変わるはずだ。……そうそう、宿屋の主人はお前の事を褒めていたぞ、“山菜採りの才能がある”とな。あの無骨な男にしては珍しいことだ」

老人が全て言い終わる頃には、リデルは何も言えなくなっていた。強く拒否したはずの気持ちをはぐらかされて、握り締めた拳の振りようがなかった。相手にはもちろん、自分にすら向けられない拳が開きかけたとき、外から大声がした。

「すみませ〜ん！誰かいらっしゃいませんかあ〜？ ……誰もいないなら犬君でも猫さんでもいいです、いませんか〜？」

微妙に頭の悪い口調は間違いなくアランのものだった。リデルはつぶさに悟り、件の男の来訪を村長に告げた。老人は頷き、招かれざる客の応対する為に立ち上がろうとした。

だが膝が弱っており、痛みをこらえながら、ゆっくりと動かざるをいなかった。長椅子ソファからようやく、手を離そうというとき、

「村長さんいらっしやいませんか〜？ いらっしやらないなら、勝手に入っちゃいますよ〜」

殆ど間を開けず、アランは繰り返し叫んだ。しかも、非常識極まりない条件付きで。

驚きの宣言に村長は目を剥いた。もし本当に入ってきたら、無銭飲食の罪に不法侵入が付いて、そのまま村から追い出せそうなものだが、訪問の背景を知らず、また突然の出来事でもあり、そこまで頭が回ってはいなかった。

しかもアランの短慮さであれば、ずかずかと入って来ても何ら不思議ではない。二人は緊張感を高め、固唾を飲んで出入り扉を見つめた。

静かなものだった。様子を見に行きたいのだが、扉が乱暴に開かれ、驚きの表情を突き合わせるのかと思うと、かなり心臓アランが悪かった。

余りにも間が空いた為、流石の不審者も諦めたのだと思ったとき、

「あ、やっぱいらっしやるじゃないですか〜！ ……おおりデルさんも一緒とは、これは神の思し召しでしょうか〜！」

——心臓が、止まるかと思った。

少なくとも、年老いて気が小さくなっている村長はそう思った。大きな櫛けやきの見える窓から、アランは突如、姿を現していた。全くもって神出鬼没な男である。

「アンタ、どこから出て来るのよ〜！」

「え〜？だって玄関から叫んだんですけど、誰も出て来てくれなかったんですよ？ちよ〜と中の様子を見て回ったって罰は当たらないと思うんですが……」

それでも不審者には変りないが、罰せられる程のことでもない。今回に限っては言えば、アランの対応は常識の範囲内だった。

憤慨するリデルを他所に、老人は乱れた心拍を整えて、問い掛けた。この辺は年の功といったところだった。

「……儂が村長のマデインマデインにギブリだ。お主、この村に用があると云っていたそうだな。要件を聞こうか」

「はあ……伺ったのは、この村に滞在させて貰うんでご挨拶を、というだけなんですが」

老人はくぐもった声で笑った。

「まさか、儂に挨拶をする為だけに来るはずもなからう？お主の仕事が早く片付けられるよう、出来る限りの範囲で協力はしようというのだ」

協力を申し出ているようで、暗に“早く出ていけ”と言っているような口ぶりだった。何の見返りも要求せずに力を貸そうというだけ親切ではあるのだが。

「本当ですか？いや、村長さんが物分りの良い人で良かった。助かります。あ、申し遅れました。私、クラムナート王国から調査依頼を受けました、囑託調査員のアラン・エクスプローラと申します。一つよろしくお願いします」

和やかなアランとは対照的に、マデインは“クラムナート王国”という単語に反応し、表情を厳しくした。

イエル村はクラムナート王国領内で東のほうに存在する集落の一つだ。王国からの査察ということは、何かこの村に疑いが掛かっているという事に他ならない。何もやましいことがなかったとしても、何となしに構えてしまうものだった。

「調査依頼……？　して、具体的には何の調べものか？」

「村長さんっ!!」

柔和な雰囲気から一転、アランは語気を鋭くして村長を名指しした。息を吐ききった所を激しく突かれ、マデインは意味もなく動転した。じっとアランを凝視し、音を立てて唾を飲み込んだ。

「——そちらに上がっても良いですかあ？　立ちっ放しで疲れちゃいました」

スパンツ——と、弾けるような音が響いた。アランの頭が室内靴で叩かれた音だった。

動物の革を鞣して作られた靴は、薄っぺらいが固く、それでいて韌やかだった。

だが、誰にでもこの爽快な音が出せる訳ではない。使い手の絶妙な技巧と角度あってこ

その妙技だろう。それ故に——

「痛ったあゝ！どうしていつもそんなに暴力的なんですか貴女は!？」

叩かれた方はかなり痛い。アランは早くもうっすら涙目になっていた。

「五月蠅いっ！　もっとマシなこと言いなさい!」

それから両者の間で抗議と罵倒の応酬が激しく展開され、收拾の切っ掛けを失いつつあった頃、村長の平和調停によって取りなされた。

ようやく部屋の中にながらなくなったアランだったが、こぢんまりとした客間に通された後、互いの気持ちを落ち着かせる意味でも、少し休憩を取ろうと皆で決め、早速手持ち無沙汰となっていた。

特にやることもないので、部屋の片隅で調度品や収集品を丹念に眺めていた。部屋の中の物はマデインと同じ時を経て来たことが伺える古めかしいものが多かった。あるいは、

新しい物には余り興味が無いのか、何にせよ極めて質素で堅実な暮らしぶりが伺えた。

村長といつても片田舎であり、特殊な産業があるでもなしに生活が潤うはずもない。余程悪いことをしていれば別の話のだが、この部屋の中では、長年かけて集められたであろう昆虫の収集品が、唯一の宝物に見えた。

「……で、何の話でしたっけ？」

砂糖楓の棚に飾られた白黒写真を眺めながら、ボソツとそんな事を呟いた。とぼけているのではなく、疲労困憊で何の話をしたかったのか考えられなくなっている様子だ。

アランは小さな銀縁眼鏡を外し、目の付け根を丹念にさする。忘却の彼方にある記憶を見るには、このくらいの儀式は必要だった。それ程に、リデルの心抉る口撃は衝撃が大きかったということだ。ところが幸か不幸か、何がしたかったのか考える前に、アランは収集品の中に世にも珍しいものを見つけた。

「もしや、これって火竜紋蝶ですか？」

「それが何か分かるのかね？」

飲み物の準備をしていた家主が、先刻とは別の驚きを示した。アランが姿を現してからずつと隙を見せぬよう努めて来た老人が、初めて見せた好奇心だった。何を聞かれても知らぬ存ぜぬで通すつもりで穿った楔に、微かなヒビが入っていた。

自分の収集品を認められれば誰でも喜ばしい。しかも持ち主しか気付いていない真の価値が秘められているのであれば尚更である。知ってか知らずか、アランはマデインの心の扉についた鍵を、寸分違わず探し当てて見せたのだった。

「はい、火竜紋蝶は有名ですから。成虫はその名の通り、翅が燃え盛る炎のような色彩と紋様をしているのが特徴的です。ちなみに、命名の由来には、そう見えるからその名が付けられたという説と、炎の中から生まれて来るその性質を言い当てて付けられた、という説があるのはご存知ですか？ リデルさん」

アランは突然、冷戦状態にあったはずの少女へ話し掛けた。冷たいお茶を啜って落ち着きつつあったリデルだが、一転してむっとした表情になる。

アランの口振りが、いかにも自分は知っているのだと言っているように聞こえたせいだった。それは完全に被害妄想なのだが、既にアランに対しては過敏反応のようなものが出来上がっていて、意味もなく反発していた。

「そんなの全っ然、有名じゃない。……そもそも、二つ意見があるってところが馬鹿らしいし」

「と、言いますと？」

「そう見えるからに決まっていますからよ！ 炎の中から生まれる蝶なんて有り得ない」

「確かに。動植物に学名を付ける場合、発見者の名前を付けたり対象の印象で付けたりと、結構適当なことが間々ありますし。実際、火竜紋蝶もリデルさんが言うように考えられてきました。ところが、最近になって後者の説が有力になりつつあります。一体、何故でしょう？ 分かりますか？」

アランの教師が勿体付けるような口ぶりに、生徒は“何でもいい”とぞんざいに答え、

残ったお茶を乱暴に飲み干した。ところがマデインは興味を惹かれたようで、手振りで続きの説明を促した。

「何故、模様が炎のように見える蝶に火竜と付けられているのか、普通の人には確かにどうでも良い話しなのですが、一部の研究者達は、火竜紋蝶が本当に炎の中に生きる蝶だと信じられて来ました。……この話のミソはここなんです、現実を信奉する研究者達に信じられていたのは大きく二つの理由があります」

話の核心であることを告げると、壁に沿って、ゆったりとした歩調で歩きだした。二人の視線は自然と動きに釣られ、意識も長身の男へ向かっていた。

「一つは名前が『火竜』あること。火炎でも大火でも良さそうなのに、炎の中で生きる竜種が由来になっている事こそ根拠でした。つまり火竜紋蝶は、火竜と同じ地域に生息しているのではないかと考えたのです。もう一つの理由は、矛盾するように聞こえますが、実は“火竜紋蝶の幼生を誰も見たことがないから”なんです。成虫は幾つかの地域で見られるのですが、飛び立つ前の姿は、妖精と掛けて幻の幼虫なんて呼ばれたりします」

「……そんなことってある訳？ 唯の蝶なんですよ？」

「はい唯の蝶です。“妖精”、つまりは精霊の類ではありません。大きさも他の蝶と違って変わりませんし、当然、炎に焼かれれば焼けて死んでしまいます」

憤然としながらも聞く耳を持った少女の様子を眺め、アランは確かな手応えを感じていた。

「ところが一点だけ、この蝶には他にはない特殊な能力があるんです」

サランドラタテハ  
「火竜紋蝶は、とても長く飛べる」

イグザクトリイ  
村長が淀みなく答えると、アランは優秀な生徒に“その通り”と賞賛を送った。

「口伝では大陸を超えて海の向こうへ渡ることが出来る、なんて言われていますが、正確なことは誰も知りませんでした。それが最近になって移動距離の仮説を立てる特性が発見されました。火竜紋蝶の紋様は、環境によってその形状にとある法則性を持つことが分かったのです。これが何を意味するかという……」  
「紋様を見ればどこから来たのかが分かる？」

村長に負けじと少女が食いついた。美味しい所を持っていかれ、アランは苦笑を浮かべた。そして鷹揚に頷き、説明を続ける。

「聞くところによると、この大陸の西端で見つかった個体が、このクラムナートで見られるものと一致したそうです。その距離、おおよそ五千キロメートル。これだけ長い距離を旅する蝶であるなら、そこからある仮説が浮かび上がります」

アランは間を置くことで、結論を述べる準備をした。幾度か話をしたことのある結論『オチ』だったが、何度語っても自然の壮大さを感じさせずにはいらなかった。

サラマンドラタテハ  
「仮説『火竜紋蝶は特定の場所で生まれ、一斉に大陸の各地へ飛び去っていき、そして生まれた場所に戻って来る特性を持った、言わば回遊蝶である』……だからこそ、どの地域でも成虫しかおらず、幼生は見つからない。それほど無理がなく考えることが出来

ると思いませんか？」

「その場所っていうのが火 竜と同じ所——つまり火山って訳ね」

「……いえ、残念ながらそこまで分かっているようですよ。ですが、その光景を見た者が火竜紋蝶と名付けたとしても何ら不思議ではない。少なくとも、話の根拠として信じる価値はありそうなことは確かです。……どうですリデルさん。なかなか興味深い話でしょ？」

「……別に興味なんて」

素直に頷きそうになったリデルだが、咄嗟に堪えていた。興味が無いと言ったものの、いつの間にかその講義に惹き付けられたこと自体、許せなかった。

リデルの少々暴力的だったり素直ではない言動は、本人の性格のようだが、ここまで掘られる原因を作ったのは、間違いなくアランの責任だろう。等の当人はこれっぽっちも気付いていないかったが。

村長は村長でなにやら考えごとをしていた。思い入れのある収集品の意外な側面を知り、過去の記憶に思いを馳せているようであった。

話に一区切り付いたことでアランが黙ると、三者三様の沈黙が訪れた。話を切り出す機会を失い、奇妙な間が空いてしまった。

しばし時が流れた後、最初に沈黙を破って話を切り出したのはマディンだった。

「……なかなか博識なお方だ。先刻、調査を行う為に、ここまで来られたという話だったが、それも何か生き物の研究が目的なのかね？」

「あ、そういえばそんな話でしたね〜すっかり何のことか忘れてしまいました。私の目的はですね、生き物といえば生き物なんですけど、少々特殊な部類でして……」

口籠るアランはおもむろに長椅子へ腰掛けると、緩やかな表情を引き締め、正面の老人を見据えた。どう言ったものか考えあぐねているようだった。

「何を勿体振ってんのさ。どうせ大したことないんですよ」

老人の隣に座るリデルが揶揄し、アランは苦笑する。

「……それがですね、“骨の折れる”というか、下手したら、死んじゃうかも知れない奴が相手です——実は、竜種なんです」

その瞬間、リデルはギョッとした表情で、宣言したアランを見た。冗談かと疑って掛かっていたが、アランの真剣な眼差しがそれを否定した。

「そうですね。あの幻獣王の異名を持つ化物——鋼鉄に匹敵する硬度を誇る牙と鱗を備え、その他の生物を圧倒する驚異的な生命力を秘めるだけでなく、上位個体によっては人語や魔導を扱う知性を持ち、過去にはその怒りを買って滅びた国も存在すると言われている、真正正銘の怪物……その眷属の、この地域における生態系について調べて来い、というのが今回の依頼なんです、はい」

悲痛な思いを込められていても、幾分かさっぱりと言うものだから、聞く者を勘違いさせかねないが、小型の竜種でも、対峙しようものなら猛獣と呼ばれる動物が可愛く見えるだろう。もし襲われでもすれば、大抵の人間は一溜まりもない。大抵の竜種は鼻が効く為、

ただ近くで観察しているだけでも十分危険な仕事だった。

少女は不安気に、隣に座る老人の方を振り向いた。ところが、その話を聞いていたはずの老人はさして驚いた様子もなかった。それどころかあくまでも無表情に、アランの視線を受け止めていたのだ。

「あれ？ 意外と驚かれなかったですね？」

「それほど驚くことでもなからう。この地域には昔からお主の言う——竜種といったか……我らは神竜様とお呼びし崇める風習があるくらいだ。見慣れてなど決して言えんが、儂は見たことがない訳でもない」

「成程、そういうことでしたか。流石は村長さんだ、お見逸れ致しました。いや〜リデルさんとは大違いですね〜」

最後の一言にカチンとなって身を乗り出したリデルだったが、村長の制止によって乱闘騒ぎには至らなかった。動揺していたかと思えば、なんとも血の気の多い少女だった。

「この娘は、まだあの雄大なお姿を見たことがない。致し方無いことだろうて……そう言うお主は見たことがあるのか？」

「ありますよ。回数で言ったら、そうですね……」

老人の挑発的な台詞に、アランは指を折って数えだした。しかし、左手の小指まで折ったところで早々に諦め、

「——いちいち覚えていられないくらいだ」

突然、そう呟いた。響いた低音は暗く、氷のような冷たさと、僅かに喜びが混じり合った恐ろしい声色だった。一瞬にして部屋の雰囲気を塗り替えたそのとき、

「……なくて言うのは冗談ですが。あ、もしかして信じちゃいました？ ……まあ、遠目から数回ですね。それでも雇い主は危険手当を出したことがないってのが、また猛烈に腹立たしい限りですよ！ プンポン！」

リデルは悪質な演技に慥然となり、村長は遅れて愛想笑いをした。緊張の一瞬から解き放たれた瞬間だった、

「ちなみに！」

アランは一際大きな声で次なる問いをぶつけ、油断していた二人を驚かせた。

「私がお仕事の話をする、聞かされた人がどんな反応をするか分かりますか？」

「ふむ……この娘のように驚くのではないかな。大抵の者は見たこともないだろうし」

軽く咳払いをして、動揺を隠しながら村長は答えた。アランはその答えに深々と頷き、

「いえ、大抵の人は笑います。何せお伽話の中の怪物ですからね〜想像が付かないんですよ、きつと」

きつぱりと否定した。何気ない質問であって外れたからどうにかなる訳でもないのだが、村長は何かまずい事をしてかした子供ののように顔を強ばらせていた。

「他の反応は大まかに言って三種類バタレンです。一つは鷹揚に頷く人。笑ってしまう人と同じで、実物を見たことがない人に多いですね。もう一つはリデルさんのように本気で怯える人。これは相手の恐ろしさを良く理解している人に見られる傾向です。最後の一つは——」

「全く反応しない人、あるいは反対に反応し過ぎる人。これは分類が難しいのですが、本質的には同じで、内面を隠そうしている人に当てはまる」

アランは“あくまで経験則”と付け加え、説明を締めた。異論・反論が飛び交いそうな場面なのだが、古い置き時計の針の音だけが、やけにはっきりと聞こえて来た。カツ、カツ、カツと、几帳面に刻む音が、何かの催促をしているようだ。

「……何が言いたいのか、さっぱり分からんな。お主は僕が何か隠しているとも言いたいのか？」

「いえいえ。先程お伝えした通り、私の仕事は竜種の調査です。この村でどんな商売ビジネスが営まれていて、その結果、どんな悪事ビジネスが成り立っていたとしても関知するつもりはありません。

……その権利もありませんね」

そういつてアランは微笑を浮かべ、悪意を突き付けては善意を否定した。

「だが願わくば、今のうちに手を引いて貰いたい……人は、求めれば与えられます。

ですが、どれほど上手く出来ているように見える仕組みでも、それが人の行為カルマである限り、いずれは人の手に還って来ます。悪意は悪意、善意は善意でという形で、必ず」

そして、その言葉以上に落ち着きのある紫水晶の瞳が静かに諭していた。

歳若い青年には似付かわしくない、苦難を知る者特有の強さとしなやかさが、優に倍以上は年の離れた老人を窘めた。たしな

老人の目尻に年輪の如く刻まれた皺しわが、一層深くなる。静かに言葉の意味を考える男の、決して口にする事のない苦悩が見て取れるような気がした。

マデインは抱えた想いの上に、更なる重石おもしを乗せた口調で応えた。

「学者ではなく宣教師だとは思わなんだ……何にせよ、憶測による言い掛かりは止めて貰おう。何の証拠がある訳でもあるまい？」

「はい。仰る通りです。……実は証拠どころか、事実さえはつきりと掴んでいないんですよね、正直言つて想像が付かないですから」

アランはあっさり自分の虚言を白状し、ここまで淡々とした受け答えをしていた老人の無表情を崩した。我関せずと、無関心を決め込み、隣りで耳を敬てたりデルでさえ、驚きに目を見張っていた。

「まあ、そちらは付録オマケみたいなのなので、適当に報告しても問題ないかなと。あ、それとですね村長さん、こんな話の後に何ですが、一つだけお願いを聞いて貰えないでしょうか？」

具体的な事は何一つ言わなかったが、本人の気分一つでどんな告げ口をされるか知れないともなると、話を聞かざるを得ない。あえて懐を晒すが決して深さを見せないそのやり口は、柔らかな脅迫であろう。いかにも上層部の目を盗んで小金を要求する小悪党の台詞だった。

リデルは言いつぶりだけでなく、その猫撫も声が気に喰わず、緋色の瞳を釣り上げた。気分的には同意したイェル村長だったが、事を荒立てる訳にもいかず、一二の句を促すと、

「お金を、貸しては貰えませんか？ ……あ、いやこういう言い方をすると勘違いされそうだな。宿の食事代をですね、二、……いやいや一週間で結構です。立て替えておいて貰えませんか？」

アランは大きな体をエビのように丸め、恐縮しつつもきっぱりと告げた。

その瞬間、先程の説教をしていた姿が霞み、幻のごとく消えてなくなると、失望を通り越して怒りの炎を灯したリデルが罵倒した。

「この甲斐性無し！何が“悪意は悪意で還って来る“よっ！結局、自分がお金を借りたかっただけじゃない！アンタ、さつきから何が言いたのか全っ然わかんないわよ！」

「はうっ！さつくり言われちゃいました！」

身も蓋もない衝撃的な言われように、アランは傷ついた——というのは言い過ぎだろうか。若干しょんぼりしたが、次の瞬間には腕を組み胸を張って開き直りをした。

「しかくしですね、リデルさん。それはそれ、これはこれです。いいですか？ そもそも、私だつて払う気はあるんです。ただ払えるお金がないだけなんです。それは理解して頂かないと困ります」

ここは開き直るのではなく申し開きをする場面だったが、借用人アランはふてぶてしく、ある意味で逞たくましかつた。奮然とするリデルが更に捲し立てると、

「ならば、ここで善意を見せておけば、善意が還って来ると期待して良いのかな」

村長がそういつて期待を匂わせる。すると今度はアランの方が異常な食付きを見せ、「村長さん、ご安心下さい。それはもう約束されたようなものです。卑小の身なれど、私ことアランはエクスプロラ、粉骨碎身の想いでこの村に貢献させて頂きます！」

軍人でもないクセに、何故か村長へ綺麗な敬礼をしていた。本人は敬意を表しているつもりなのだろうが、目の輝き方が、まるで餌メネーを鼻先にチラつかされた駄犬デニビラだった。

その様子を、リデルは忌々しげに見つめていた。

(……偉そうなことを言っておいて、結局それか。コイツも他の奴らと同じだ)

「リデルや、宿に言つて儂が立て替える旨、伝えて来てはくれんか」

少女は何か言いたげにしていたが、渋々と依頼に応じた。

アランは嬉々として立ち上がると、気乗りでない少女の背中を無理やり押しやった。

二人が出口に差し掛かったとき、アランは思い出したように家の中を指差してこう言った。

「そういえば、村長さんは古いモノを随分と大事にされているんですね」

それは思い付きのようで当たり前の感想だった。だがマデインは言われて初めて気がついたかのように、部屋の中を見渡した。

「……若者は古いものを嫌うが、儂は何故か子供の頃から古い物の方が好きだった。この村も同じだ。決して豊かではないし、変わり映えもしないが儂の故郷だ。責任者の一人として守つていかなければならん」

誇らしげな答えだった。古きモノの一つ一つが、自分にとっての誇りなのだ。守るべきものを知る老人の表情は力強く、重ねて来た歲月の重みを感じさせた。

アランはにわかには真剣な眼差しを向け、そして鷹揚に領ずくと、  
「さあ早く行きましょう！店の主人が拳を温めて——もと、首を長くしてお待ち  
です」

そうやって元の飄々とした雰囲気に戻り、客間を後にしたのだった。